

## 15 スクリーニングで発見された食道小細胞癌の1例

佐々木正貴・池田 義之・大竹 雅広  
須田 武保・柴崎 浩一\*・中島 孝司\*\*  
味岡 洋一\*\*\*

日本歯科大学新潟歯学部外科  
同 内科\*  
新潟中央病院内科\*\*  
新潟大学大学院分子病態病理\*\*\*

症例は72歳男性。スクリーニング目的の上部消化管内視鏡で胸部下部食道に軽度の扁平隆起を認め、生検で小細胞癌（内分泌細胞癌）と診断された。術前精査でリンパ節および他臓器転移は認めなかった。手術は経裂孔食道切除術を行った。切除標本では10×5mm大の0-I sep腫瘍を認めた。病理診断は内分泌細胞癌，sm3，n（-）で病理組織学的進行度はp Stage Iであった。免疫組織化学的検査ではNCAMが陽性だった。術後High dose FP療法を3コース行い、術後6ヶ月の現在再発を認めていない。

## 16 臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清の考え方

藍澤喜久雄・佐野 文・森岡 伸浩  
清永 英利・宮下 薫

燕労災病院外科

【目的】臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清範囲を考察する。

【方法】切除胃癌1087例中の中部胃癌317例（29.2%）と下部胃癌506例（46.5%）の823例（75.7%）を検討対象とした。

【結果】リンパ節転移陽性率は、中部胃癌；29.7%，下部胃癌；42.3%であった。また、進行癌で73.4%，下部胃癌の未分化型癌で65.8%と高率であった。部位別リンパ節転移陽性率は、中部胃癌では第1群のNo. 3, 4d, 1, 第2群のNo. 7, 8a, 下部胃癌では第1群のNo. 6, 3, 4d, 5, 第2群のNo. 8a, 7, 9が高かった。No. 11pの転移率は3.6%であった。

【結語】中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清

は、D2郭清の範囲で行う。進行癌、とくに下部の未分化型癌のリンパ節転移陽性率は高く、これらに対しては、第2群のリンパ節郭清を精度よく行い、郭清範囲の拡大も考慮すべきである。

## 17 切除不能進行胃癌に対する術前化学療法としてのTS-1+CDDP療法

大橋 学・神田 達夫・坂本 薫  
矢島 和人・田邊 匡・小杉 伸一  
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】切除不能進行胃癌に対する術前化学療法（NAC）としてのTS-1+CDDP療法の治療成績を検討する。

【対象と方法】2002年1月から2005年4月までの間に、治癒切除不能胃癌と診断された31名を登録した。対象患者にはTS-1+CDDP療法を行い、治癒切除可能となれば腹腔鏡検査で播種がないことを確認後手術を施行した。手術施行割合と生存期間について検討した。

【結果】31名中7名（23%）が切除可能と診断された。しかし、実際治癒切除を施行された患者は4名（13%）であった。全患者のMSTは341日、1年生存率は39%であったが、治癒切除患者においてはMSTには達せず、1年生存率100%であった。

【結論】切除不能胃癌に対するNACとしてのTS-1+CDDP療法で治癒切除が可能になる患者は10%程度に過ぎない。しかし、治癒切除が可能であった患者の予後は期待が持てる成績である。

## 18 大腸癌術後肺転移に対して抗癌剤の時間治療は有効である

宗岡 克樹・白井 良夫\*・若井 俊文\*  
横山 直行\*・畠山 勝義\*

新津医療センター病院外科  
新潟大学大学院消化器・一般外科\*

【目的】抗癌剤を至適投与時間に投与する時間